地道な活動によってユーザーや他業界からの注目度もアップし、新たな道へと歩み出す。

全日本遊技事業協同組合連合会の支援を受けて2006年に発足したリカバリーサポート・ネットワークは2009年10月に特定非営利活動法人となった。認知度も上がり、相談件数も増加した同法人は、ぱちんこ・スロット依存問題の解決のため、より学術的な研究とともに、さらに幅広い専門分野を視野に入れたネットワークづくりを始めている。

警察署など他機関での認知度があがり、相談件数は増加。

リカバリーサポート・ネットワークの活動は今年で4年目を迎えた。開設当初は月に数十件だった電話相談も2009年度の上半期は、120件／月ほどの推移を見せている。精神科医でリカバリーサポート・ネットワーク代表の西村直之さんは件数の増加を次のように分析している。

「ホールの皆様の理解が深まりポスターを貼ってくださるところが増えたことと、警察や一般の相談機関の中での認知度が高まり、そこからのご紹介というケースも出てきました」

最初は本当に活動をしているのかと半信半疑だった人たちも、その後の地道な活動状況を知るにつれ、信頼度を増していったということだろう。

毎月関係機関に向けて発行している情報誌「さくら通信」も読者が増え、警察署などに行くと「読んでいますよ」と声をかけられるようになった。ぱちんこ・スロットの依存問題を専門に扱っている情報源はここにしかない。その貴重性も認識され始めているようだ。

同法人事務局で電話の応対をしている主任の横山順一さんによると

「『それほど深刻ではないのだけれど』と相談してくる本人からの電話も増えました。よくよく話を聞くと十分に深刻なのですが、ご本人はそうは思っていないことが多いのです」と苦笑いをする。

パチンコホールのトイレに掲示を依頼している啓発・告知用のポスター。一瞬現実に戻れるトイレに貼ってもらうようお願いしている。実際に、トイレで見かけて相談電話の利用につながったケースも多い。

本人は問題を認めたがらない傾向が強いが、本人たちが電話相談を行うようになってきたのは、相談窓口があることを知り、問題として自覚する人が増えてきたことを示している。

真の解決には、幅広いネットワークづくりと学術的研究が不可欠。

西村さんによると、ぱちんこ・スロットへの依存という問題が単独で存在しているということはあまりない。例えば精神科的疾患などがあったり、夫の家庭内暴力があったり、一人暮らしで行き場がないなど、他の要因と複雑に関連しているものも多い。したがって、もっと幅広い視点で研究しなければ真の解決策を見いだせないという。

「ですから、今後の活動の方向性として、病院や司法書士、弁護士、消費者団体などとの連携や情報交換を強化する必要があると思います。また、問題点ばかりを探るのではなく、どういう娯楽のあり方が好ましいのかを学術的にとらえて体系的にまとめていく作業も必要になるだろうと思います」と西村さんは語る。

「ギャンブリング問題介入の基礎」と題して、全国各地で行っているセミナーもこうした活動の延長線にある。そこでは、さまざまな職種や立場の人がギャンブル依存問題の特性を知り、意見を交換しているのである。

2009年10月に、リカバリーサポート・ネットワークは特定非営利活動法人の認可を得た。これまでは、業界団体の一機関として見られていた面もあったが、今回の法人化によって多様な分野への働きかけもしやすくなった。また、包括的なギャンブリング関連問題を研究する上でも動きやすくなったという。

現在、法律関連の大学からは共同研究が持ちかけられており、また、海外の研究機関から情報提供を求められているなど、西村さんの描く方向に近づいているのは確かだ。

しかし、それを実現するにはマンパワーの充実も必要である。西村さん自身はボランティアで参加しており、本業の仕事もあるため限界があるからだ。

兵庫県で行われた「ギャンブリング問題介入の基礎」セミナーの様子

担当者より

ぱちんこ業界の取り組みが、他業界からも評価されています。

NPO 法人
リカバリーサポート・ネットワーク
代表
西村直之さん

社会的な反発などリスクを伴っているにもかかわらず、ぱちんこ業界がぱちんこの負の側面について取り組んだことは日本の企業の社会貢献活動のあり方に一石を投じました。今、その取り組みが他の業界から評価され、単なる相談窓口の立場から、業界とユーザー双方に魅力的な人にやさしい娯楽の研究までを視野に入れたものになりつつあります。NPO法人化を機によりいっそうの努力を重ねて参りますので、引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

「スタッフを拡充すればコストもかかるので、今いる人材を育て企画立案や実施できるようにしたい」と西村さんは語る。幸い、主任の横山さんをはじめスタッフがセミナーの一部を担当できるようになってきた。日本で唯一のぱちんこ・スロット依存問題相談機関は、特定非営利活動法人として新たな道を進み始めた。

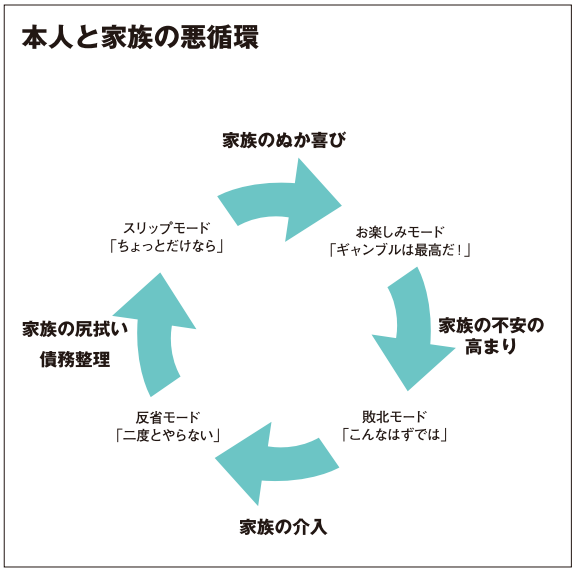
ギャンブリング依存問題のネットーワーク拡充を目指し定例セミナーを4回開催。

NPO法人リカバリーサポート・ネットワークが、各分野との連携を強化するために開催しているセミナー「ギャンブリング問題介入の基礎」は2009年度に4回開催された。2010年2月24日(水)に兵庫県こころのケアセンターで行われた様子をレポートする。

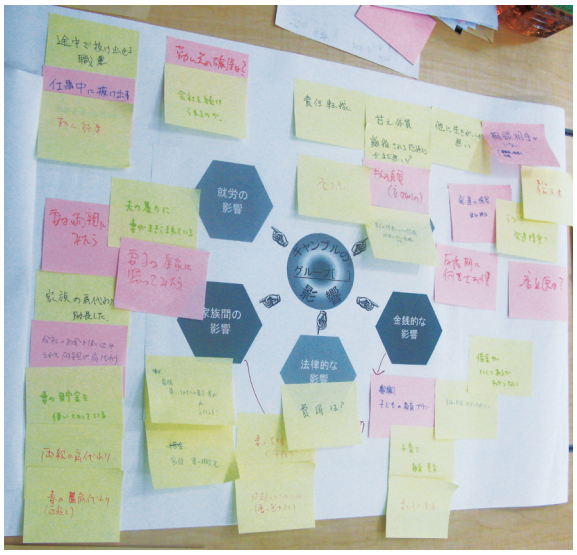
この日のセミナーには、弁護士、社会福祉士、医師、保健師などさまざまな分野の専門家約60名が集まった。

午前中はリカバリーサポート・ネットワーク代表の西村直之さんによる「ギャンブリング関連問題のとらえ方～評価とマネジメントの基礎～」の講義である。ギャンブリング問題の基本的な考え方から、実例に学ぶ分析まで内容は幅広い。特にアルコールなど、通常のアディクション・モデルとギャンブリング問題の差異については、参加者にとって初めてのようで、しきりにメモをとる姿が見られた。またギャンブリング問題の評価法については、後で質問が出るほど関心が高かった。

午後は、司法書士でNPO法人ワンデーポート理事長の稲村厚さんが「ギャンブリングへののめりこみとその対策」をテーマに講演した。図にあるように、ギャンブリング問題を持つ本人の中には4つのモードがあるという。この中で「反省モード」にあるときが、立ち直りをサポートできる唯一のチャンスだそうだ。また、本人の問題と家族の問題は切り離すべきであり、「借金の問題など、ついつい家族が尻ぬぐいをしているケースがあるが、それをしても問題を長引かせるだけだ」と稲村さんは語った。



反省モードの時が語りかけるチャンスである
2010年2月24日開催「ギャンブリング問題介入への基礎」での稲村厚氏の資料より許可を得て抜粋



ケーススタディを聞いて関連する問題をカードに書き出して整理するなど、参加者にとっては大変有意義でユニークなセミナーとなった

講義のあと、参加者は7名程度のグループに分かれテーマに沿ってディスカッションを行った。ケーススタディを聞いて、関連する問題をカードに書き出して整理したり、それぞれの問題が発生したときに想定される相談窓口などについて語り合う。まったく異なる分野の専門家の集まりだけに視点が異なって、なかなかおもしろい試みである。終わった頃には、皆一様に「もっと時間が欲しかった。横の連携が必要だとあらためて感じた」と述べていた。

最後に2人の講師への質疑応答があり閉会となったが、参加者同士で名刺交換を行うなど今後の広がりを予感させるようなセミナーであった。今後、北海道など全国各地で開催していく予定である。